



曉鐘の音

NO. 36

(かねのね)

秋田大学教職大学院 2025.09.01

はじめに

新学期のスタートからおよそ5か月が経ち、早くも8月の終わりを迎えました。そんな残暑が厳しい中でも、院生は日々の学習や研究に力を注いでいます。

今号では、前期に行われた授業や行事を中心に、院生と先生方から素敵な原稿を頂戴いたしました。実りある後期につなげていくために、前期の歩みをどうぞ一緒に振り返っていただければと思います。

よく遊びよく学んだ頃のこと

教職実践専攻（教職大学院）

教授 成田 雅樹

1997年盛夏。私は軽井沢のテニスコートにいた。ラジオニュースでは、30度超えだという東京の様子を報じていた。標高1,000メートルの高原は20度ほどで、スポーツで汗を流すのにちょうどよい。折しも「ブバシ・平木ペア」の混合ダブルス世界優勝が話題をさらっていた。現職院生だった私は、10歳も若いストレートマスターと混合ペアを組み、高原にボールの音を響かせていた。

私たちはこの前日、軽井沢の隣、御代田町にある通称「熊小屋」にやってきた。御代田町は、清浄で湿気の少ない気候のため、世界のSEIKOが採用するムーブメントを製造する会社（「ミヨタ」）がある町だった。「熊小屋」は、当時の私の指導教員であった大熊徹先生の別荘である。

ゼミ生は、「熊小屋」に到着して荷物を片付けると、リビングに集まって勉強会を始めた。当時の私の同期院生は、現職1人（N）、ストレートマスター2人（AとT）であり、埼玉県から派遣された長期研修生1人（K）もいた。私たちは順に研究の進捗状況を報告した。他学年生やOB・OGの参加者も含め、ひとしきり議論を交わすと、大熊先生が総

括してくださった。先生は常に建設的な提案をしてくださる方だった。打開策が見つからなくて停滞していた研究に、明るい展望が見えた。

夕方になり、みんなで最寄りのスーパーへ買い出し。「熊小屋」に戻ると、順にお風呂をいただき、にぎやかな宴が始まった。大熊先生が知り合いから入手したという新鮮な馬刺し。隣県新潟の銘酒「雪中梅」の無ラベル（蔵元から直に入手?）。一升瓶が瞬間に軽くなっていく。半分寝こけながらマージャン卓を囲む者、「運動会で手をつないでゴール」の賛否を議論する者など、場はいよいよカオスとなり、夜は更けていく。



恩師・大熊徹先生（左）と大口を開けて笑う私（右）

朝は野鳥の声で目覚め、丸太のテラスに出て、夕べ買い込んだパンとコーヒーで朝食を済ませる。白樺林の空気は Green。徐々に頭がすっきりしてくる。

午後から用事があるという A は、特急あずさに乗るために午前中で「熊小屋」を後にした。

他の者は、昼食のために信濃追分の信州そば屋へ。食後、私たちは冒頭場面のテニスコートへ向かうのだった。

今は、大熊先生も、その後国立大学に赴任した N も、鬼籍に入った。K も埼玉県の中学校長を定年退職して数年になる。A は修了後、宮家の侍従を務めた後、都内の小学校教師になった。

かくいう私は還暦を過ぎ、心身の衰えを感じない日はない。しかしあのころ、健康でエネルギーに満ち、明日を疑わなかった若き日が、私を支えている。

ヘリコプターペアレント

教職実践専攻（教職大学院）

特別教授 近江谷 正幸

我々教師は、当然のことながら、良い授業、分かりやすい授業を心掛け、どうすればより楽しく、理解しやすい授業になるか、日々模索し、研究している。児童生徒にとって望ましい授業というのはどのような授業なのだろうか。

学校現場では、教育委員会の指導主事が学校を訪問し、授業についてアドバイスをいただく機会がある。以前勤めていた学校で、授業を参観していただいた指導主事から、「多くの授業で非常にきめ細かく、行き届いた指導がなされています。生徒がつまずきやすいところをきちんと押さえ、丁寧に説明されていました。」とお褒めの講評を頂戴した。しかし、「ただ、…」と言葉が続いた。

「先回りして生徒がつまずきやすいところを回避していますが、ある程度のつまずきも、時には必要となることもあるかもしれません」。指導の過程で敢えてつまずかせることを授業の中に組み入れ、そこから学ばせることも必要ではないか、という御指導であった。その時、ある言葉を思い出した。

“ヘリコプターペアレント”。あまり耳慣れない言葉だが、アメリカの医師が使った言葉で、警

察のヘリコプターのように我が子の頭上でパタパタと旋回しながら見守り、何かあれば降下して援助に向かうような親を皮肉って指す言葉だという。子どもの危険を回避し、守ろうとするのは親として当然のことであるが、子どものためによかれと思って事前に危険を摘み取ることにより、自分自身で判断する場面がなくなり、いざというときに対応するための力を育む機会を奪ってしまっている、と言えなくもない。

獅子のように敢えて深い谷に突き落とす必要はないが、我々大人は失敗経験から学ぶことが多いこともよく分かっている。順風満帆な人生を歩んでいた人が、ほんの些細なことで立ち直れなくなってしまうことも多い。取り返しのつかない失敗をする前に、耐性を身に付けさせることも必要であろう。

自分自身の授業を振り返り、親心と思って指導していたことが過保護だったのではないかと自問自答している。少なくとも、「行き届いたきめ細かな指導」が手放しで喜べる褒め言葉ではない、ということをお伝えしておこう。

あきた惟路の会

学校マネジメントコース 現職院生 1 年次 富樫 真雄

8月8日(金)、秋田大学60周年記念ホールにおいて「あきた惟路の会」総会・研修会が開催された。

第一部の研修会では、昨年度の修了生から、今年度赴任した勤務先での近況や研究の進捗状況について報告があった。いずれの修了生も新たな環境に適応し、職務に励みながら充実した日々を過ごしている様子が伝わり、晴れやかな表情が印象的であった。来年、自分が同じ立場で報告できるか不安はあるものの、「大学院での学びが生きている」という修了生の言葉に勇気もらい、現場復帰に向けて今後の授業に一層励んでいこうという思いを強くした。

第二部では、今年度の事業計画や修了者へのフォローについて説明があった。今年度、教職大学

院は10年目を迎え、これまでの修了生は163名(現職院生92名、ストマス71名)になるという。一期生の方から受け継がれてきたバトンが、いま自分たちに渡されていると考えると身が引き締まる思いである。4月に大学院生となった当初は、この年齢で新たな同期を得ることに不思議さを感じたが、今回の総会では大学院の「縦のつながり」を強く意識することとなった。

今回の総会・研修会は、修了生の活躍に触れるとともに、教職大学院の歩みに思いを巡らす貴重な機会となった。私は「あきた惟路の会」の目的にある教職大学院の発展と修了生の躍進は相互関係にあると感じている。自らもその一員として大学院の発展に寄与できるよう、これからも研鑽を重ねていきたい。

令和7年度あきた惟路の会納涼祭を終えて

カリキュラム・授業開発コース 学部卒院生 2 年次 近藤 聖真

8月8日(金)に、令和7年度のあきた惟路の会が開催されました。私は厚生班に所属しているため、幹事として惟路の会の企画・運営を行いました。昨年度は大学会館で行いましたが、今年度は利用できないということで、納涼祭の準備はお店探しから始まりました。縁あって「ブランジーノアキタ」というお店で開催することができました。参加人数は67名と、とても賑やかな会になりました。

美味しい料理や飲み物を楽しみながら、充実した時間を過ごすことができ、2時間の納涼祭はあ

っという間に時間が過ぎたように感じます。恒例の田仲先生のなぞかけに始まり、恩師と教え子による「ルネッサンス！」の乾杯、大盛り上がりのワードウルフなど、たくさんの思い出が胸に刻まれています。座席は昨年度の院生室を意識して決めさせていただきました。特に昨年度の修了生の皆様にとっては、昨年度の苦楽を共にした仲間たちとの再会に話が弾んだのではないのでしょうか。教職大学院で学ぶ期間は、たった1年から3年程度です。惟路の会が、一緒に学んだ仲間たちのつながりをさらに強固なものにし、悩みや不安を共

有し合い、助け合っていくきっかけになれば幸いです。

最後になりますが、藤井先生はじめ、一緒に企画・運営を行った厚生班のみなさんの素晴らしい働きのおかげで、会は大成功に終わりました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。来年は10周年記念ということで、ますます盛り上がることでしょう。私は修了生として参加することになります。来年、皆様と再会できることを楽しみにしております。



前期実習での学び

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生1年次 嘉藤 麻菜

前期は、附属幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校を回る4校園実習を行い、その後、附属中学校で5日間、計10日間の実習を行わせていただきました。

4校園実習では、児童・生徒理解の大切さを学びました。特に、幼稚園での実習は初めてということもあり、正直、どう子どもたちと接したらよいか戸惑っていました。そのため、4校園実習では初心に立ち返り、現場の先生方の指導の仕方や支援、声掛けを観察し、なぜそのような言動を行っているか、背景を考えることを重視して実習を行いました。校種が異なる学校を短期間で回ったことで、発達段階や特性に合わせた支援・指導の違いに気づくことができました。また、特別支援学校では、1人1人の将来を見据え、子どもの思いや願いを聞き取りながら教育課程や教育方針を丁寧に考えていることが印象的でした。子どもたちが社会の中で自分らしく生きていくために、どの校種においても重要なことであり、日々その努力を怠らないことで、よりよい教育に繋がると学びました。

附属中学校の実習では、最終日に2時間授業をさせていただき、改めて、授業の難しさを感じました。相似の単元の1時間目を担当し、生徒自身で相似な図形の特徴を見つけるという学習活動を行った際、非常に多くの興味深い考えが生徒から出てきました。しかし、それを瞬時に理解し、授業に活かすことができませんでした。生徒の考えを予測する能力や臨機応変に対応する技量の未熟さを痛感しました。その一方で、数学の授業の面白さを強く感じたことも大きな収穫の1つです。予想もしなかった考えや疑問が生徒から出てきたとき、教師の立場で授業を行いながらも、数学の奥深さや面白さを感じました。数学を生徒とともに探究し、創り上げていく瞬間は、数学教師としての大きなやりがいであり、今後このような瞬間を共有できる授業を作るための原動力になりました。

後期実習やこれからの大学院生活では、理論と実践の往還を大切に、教師としての資質・能力を高めていきたいです。

「令和7年度 第1回 全県指導主事等連絡協議会」を参観して

カリキュラム・授業開発コース
現職院生1年次 南 陽子

4月21日、秋田県総合教育センターで実施された「令和7年度 第1回 全県指導主事等連絡協議会」を参観させていただきました。このような機会を得たのは初めてでしたので、とても貴重であったと感じています。私は、午前は「教育課程部会」、午後は「算数・数学部会」を参観しました。

午前の「教育課程部会」では、学校現場における授業の実施時数や、標準時数を上回る時数の使い方などが共有されていました。また、校種間連携やICT活用の事例共有、CSの取り組み方等の共有も行われ、「教育課程」というカテゴリーが多く分野にかかわっているということを実感しました。参観する前は「カリキュラム・マネジメントがあった上で、各教科や領域の工夫がある」という認識をもっていたのですが、逆に「『教科や領域から何ができるのか』という視点をもって考える必要がある」というお話を聞き、なるほどと思いました。何事にも受け身にならず、自分の担当する分掌から学校の教育課程に対して何ができるのか、という積

極的な姿勢を身に付けていきたいと感じました。

午後は「算数・数学部会」を参観しました。令和7年度の重点の具現化に向けて、これまでの具体策、検証方法、到達目標についてお話があり、続いて、各所属における今年度の重点等についてお話がありました。その後、「令和7年度 授業改善のための観点（算数、数学）」の内容について、およそ1時間20分をかけてグループ協議が行われました。私は、学校現場で私たち教員が手にする一つの資料を作成するために、ここまで時間を掛け、深く協議されているということを知り、資料の一つ一つに込められた熱量を改めて感じました。同時に、学校現場における一教員として、「資料に文言として何が書かれているか」だけではなく、「その行間に、どのような思いが込められているか」を汲み取ろうとする姿勢が大切であるように感じました。

その場に身を置くことでしか感じられない雰囲気を感じることができ、とても勉強になりました。この経験を、これからの実践に結び付けていきたいと思います。

桜の季節に向かって ～理論と実践の往還から見える新たな景色～

学校マネジメントコース
現職院生1年次 黒澤 英美子

大学院に入学して以来、「夕日に向かって走れ」タイプだった私の頭の中は、理論と実践の往還で常に忙しい。講義中、先生方からの最新の知見や知識のシャワーを浴びながら、その内容を学校現場の具体的な場面と結び付けて考えるうち、90分は瞬く間に過ぎていく。まるで大学と学校とを行き来しているような感覚だ。

日々の学びの中で、これまで出会った子どもたちの姿や、現場で日々奮闘する教員仲間の顔が自然と浮かんでくる。多くの人との関わりを通して得た経験が、講義で理論と照らし合わせることで新たな意味を持ち始めている。「あのことはこう

いう理論で説明できるのではないか」「この方法を導入すれば、よりよい支援が可能になるのではないか」と、過去の実践を再評価したり今後の方略を検討したり、次々に考えを巡らせ、試してみたい試案も列をなしている。結果、思考は飽和状態ではない。そんな私の支えとなってきているのが、現職院生やストマスの皆さん、多様な視点から学び合える頼もしい仲間の存在だ。一人では解決しない課題も新たに生まれた疑問も、対話を通

して少しずつ整理され、自分の中に消化されていくのが分かる。

この4か月間の私の中のブラッシュアップは、これまでの数年間の比ではない。大学院での学びは、単に知識の習得だけではなく、現場に対する新しい見方や考え方を与えてくれる貴重な契機となっている。学ぶべきこと、考えるべきことはまだまだ多く、自分の目指す道のりは遠いが、後期も駆け抜けるように過ぎていきそうだ。理想だけではなく具体的な方策をもって置かれた場所で咲けるように、一步一步自分を磨いていきたい。新たな春を迎え

る頃には、自信をもって顔を上げ、満開の桜を見上げられるように。



筆者が撮影した満開の桜（手形キャンパス内）

結びに

この度は、暁鐘の音第36号をご覧いただき、ありがとうございます。今号では、院生には前期の授業や行事を振り返って、成田先生には夏の思い出について、近江谷先生には教員時代に考えさせられたエピソードについて寄稿いただきました。一年の半分が過ぎ、慌ただしい日々の中にあっても、教職大学院としての団結力や組織力が着実に高まってきているのを感じております。後期におきましては、これまでの歩みを土台として、秋田大学での皆様の時間が、より一層実り多いものとなることを願っております。

暁鐘の音 第36号 編集担当 佐藤里香

